

萬葉集 六



完訳 日本の古典 7

萬葉集 六

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 校注・訳



小学館

完訳 日本の古典 第七巻 萬葉集(六)

昭和62年9月30日 初版発行

定価一七〇〇円

校注・訳者 小島憲之 木下正俊 佐竹昭広

発行者 相賀徹夫

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒101 東京都千代田区一ツ橋二―三―一

振替口座 東京八―二〇〇番

電話 編集(〇三)二九二―四七六三 業務(〇三)二
三〇―五三三三 販売(〇三)二三〇―五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作権および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。
Printed in Japan

© N.Kozima M.Kinosita 1987 (著者検印は省略)
A.Satake (いたしました)
ISBN4-09-556007-X

目次

凡例	三
----	---

卷第十八	九
------	---

卷第十九	九五
------	----

卷第二十	二〇九
------	-----

解説	三五三
----	-----

付録

萬葉集関係略年表	三六八
----------	-----

初句索引	三七二
------	-----

口絵目次

藍紙本万葉集	1
唐大和上東征伝絵巻	2
因幡国庁跡	4

〈装丁〉

中野
博之

凡 例

一、本書は、現代の多くの読者に『万葉集』に親しんでもらえるように配慮して、読み下し本文を左ページに、現代語訳を右ページに示して対照しやすくし、下段に簡潔な注解をほどこしたものである。

一、本文

1 左ページの本文は、西本願寺本万葉集を底本としてあらたに校訂を加えたものを、漢字仮名混じり文に読み下したものである。なお、原文はすべて漢字によって書かれているが、本書においては割愛した。

2 用字については、常用漢字表にある漢字は、原則としてそれを用いた。

3 読み下し本文を作るにあたり、古写本の校合は、校本万葉集によると共に、実見することを得た本（元暦校本・藍紙本・紀州本・神宮文庫本・西本願寺本・陽明本・大矢本・京都大学本など）については実物によつて再検証し、また類聚古集・古葉略類聚鈔などの、複製本を以て代替可能と思われる本はそれによつた。春日本・金沢文庫本などの諸家に伝わる断簡類についても、博搜に努め、誤りなきを期した。

4 「或本の歌に曰く」「一に云ふ」などの異伝に関する注記、あるいは訓注の類は、へでくくつて示した（現代語訳もこれに準じる）。

5 訓読は、先学の諸説を検討した上で、最も妥当と認められる説によつたが、そのいずれにも従いがた

い場合は、校注者の見解にもとづいて読んだ。

6 いわゆる難訓歌に対しては、強いて異を立てず、原文のまま掲げて、後考を待つことにした。

7 読み下し本文および現代語訳の上につけた歌番号は『国歌大観』による。

8 読み下し本文・現代語訳とも、一句ごとに一字分の空白を置いた。

9 題詞・左注の読み下し文は、上代散文にふさわしい文体を復原することに努めた。

10 目録は、すべての現存古写本は各巻巻頭にあるが（巻十六以下の非仙覚系諸本を除く）、本書においては割愛した。ただし、校注の参考になるものは、該当箇所脚注にこれを引用し、理解の助けとした。

一、現代語訳と脚注

1 現代語訳はなるべく原文から離れないように直訳に近い形をとった。歌意は随時脚注を参照しつつ把握されたい。

2 枕詞は（ ）でくくり、仮名づかいも本文のままとした。

3 脚注は本文の理解に必要な事項を簡潔に記した。

4 出典などに関して参考に関いた漢文は、原則として片仮名混じりの読み下し文に改めた。

5 紙幅の関係上、同一句や類似句の説明で前出（まれに後出）したもの、または参考になるものは↓で示した。平数字は歌番号を示す。

6 作品の理解を助けるため、参考となる関連事項・評言などには◆印を付し、語の注と区別した。

7 脚注の振り仮名は現代仮名づかいにしたが、本文中にある語についてはそのまま示した。

一、その他

口絵に掲載した「藍紙本万葉集」については五島美術館の、「唐大和上東征伝絵巻」については唐招提寺の協力を得た。「因幡国庁跡」は岸俊男氏の撮影に成る。

萬
葉
集

萬葉集卷第十八

萬葉集卷第十八

天平二十年の春三月二十三日、左大臣 橘卿（諸兄）の使者造酒司

令史田辺福麻呂に国守大伴宿禰家持の館で饗応した。その時新たに歌を

作ったり、またついでに古歌を誦詠したりして、各人思いを述べた。

4032 奈呉の海に 舟をちよつと貸してください 沖に出て 波が立って来ないか 見

て帰って来ましよう

4033 波が立つと 奈呉の浦辺に 寄る貝のように 絶え間なく思つて 年月は過ぎて

しまいました

一 七四八年。家持三十一歳。この三月二十三日は太陽暦の四月二十五日に当る。
橘諸兄。美努王と県犬養宿禰三千代との間に生れ、初め葛城王と称した。天平元年（七五〇）左大弁となり、同八年臣籍に下り橘宿禰諸兄と称した。翌九年藤原武智麻呂らの高官が相次いで病死した後重用され、大納言、右大臣などの要職を歴任、十五年には従一位に昇り、左大臣に任ぜられた。光明皇后の異父兄であり、聖武天皇の信任も厚かったが、政治感覚に新味を欠き、しだいに実力をつけてきた藤原氏に距離を縮められつつあった。大伴氏に対して友好的で、特に家持に親近感を抱いていた。この年六十五歳。「橘家」の「家」は家格の高い氏に限って用いられる敬称。

三 造酒司は宮内省に所属し、酒類の醸造をつかさどる役所。令史はその第三等官で大初位上相当の微官。ただし、造酒司の官人は位階が低くても収入が多く、

萬葉集卷第十八

天平二十年春三月二十三日てんびやうに、左大臣橘家の使者造酒司さけのつかさど

令史田辺福麻呂さくわんだのふくのさきまろに守大伴宿禰家持かみおほともの館むろつみに饗あへす。ここに新しきあらた

歌を作り、并あはせて便すなはち古詠こよを誦よみ、各おののおの心緒こしゆを述ひぶ。

4032 奈呉なごの海うみに 舟ふねしまし貸かせ 沖おきに出いでて 波立なち来きやと 見て帰かへ

り来きむ

4033 波立なてば 奈呉なごの浦廻うらみに 寄よる貝かいの 間まなき恋こひにそ 年としは経へに

ける

田辺福麻呂は諸兄の知遇を得てこの職に就けられたのであらう。

四 この卷十八巻頭に記されてあること以外には所伝がない。卷六・九に「田辺福麻呂歌集」の中から採つたとある歌が合計三十一首あるが、すべて彼の作と考えられる。なお、「田辺」はタノベと読む。

五 ↓四三九題詞。越中国守の居館は富山県高岡市伏木古国府ふるくにのふりの、現在勝興寺がある一帯に擬せられてゐる国庁の裏手、同寺本堂付近にあつたと推定されてゐる。

六 四〇三二・四〇三四などをさす。

4032 奈呉なごの海うみ——高岡市伏木から新湊市の放生津はなうづ一帯にかけての海浜。高台にあつた越中国庁から東南東の方角に望見できる。○波立ち来やと見て帰り来む——波の律動に興味を覚えていう。大宝元年（七二）の紀伊行幸に供奉した官人の歌に「釣する海人を見て帰り来む」と詠んだものが二首ある。

4033 奈呉の浦廻——奈呉の浦の海浜。ミは周辺部。○寄る貝の——以上三句、貝殻が絶えず海岸に打ち寄せられることとから間ナシを起す序とした。○間なき恋——作者福麻呂がこれまでずっと家持を慕い続けた気持をいう。○恋歌に似せて久闊きうくわんを叙する挨拶あいさつの歌。

4034 奈^な呉^ごの海に 潮が引いたらすぐにも 餌^えを求めに 出ようと鶴は 今や鳴いてい

る

4035 ほととぎすよ いやな時などないぞ あやめ草^{くさ}を 纒^{むす}にする日は ここを鳴いて

過ぎよ

右の四首は、田^た辺^へ史^し福^ふ麻^ま呂^ろ

その時、明日^{あす}布^ふ勢^せの水^{みづ}海^{うみ}に遊^{あそ}覧^{らん}しようと約束し、そこで思いを述べて、

各人が作った歌

4036 どれほどの 布^ふ勢^せの浦^{うら}なのですか こんなにも あなたが見せようと わたしを

引き留めるとは

右の一首は、田^た辺^へ史^し福^ふ麻^ま呂^ろ

4034 あさりしにーアサリスは四段動詞アサルをサ変に再活用させた語。アサルは食料となるものを求めて動きまわる意。人や獣についてもいうが、鳥類に用いることが多い。この二は目的を示す。

○鶴は今そ鳴くなるー上代語のタヅは、たんちよう(丹頂)やまなづる・なべづるなどの鶴類に限らず、白鳥やこうのとり・おおさぎなど水辺にいる大型の鳥をさしたと思われる。鶴は一般に、秋飛来し春三月上旬に北帰する習性で、この歌に見るように、新暦四月下旬越中海辺に見られる鳥はこうのとりなどをさしたのか。このナリは伝聞推定を表す。

4035 厭ふ時なしーイトフは、単にいやがただでなく、対象物に顔をそむけ避けようとすることを表す。○あやめぐさは水辺に自生するさといも科の多年草。初夏花茎の中期に肉穂花序の黄白い小花をつける。根茎・葉など全体から独

4034 奈呉なごの海に 潮のはや干ひば あさりしに 出いでむと鶴たづは 今そ鳴

くなる

4035 ほととぎす 厭いとふ時なし あやめぐさ 纒かづらにせむ日 こゆ鳴き

渡れ

右の四首、田辺史福麻呂

ここに、明日布勢あすのひふせの海水みづうみに遊覧ゆうらんせむと期きし、仍よりて懷おもひを述べ、

おのもおも
各 作る歌

4036 いかにある 布勢ふせの浦うらそも ここだくに 君が見せむと 我われを留とど

むる

右の一首、田辺史福麻呂

特の香氣を発し、これが邪氣を払い疫病を除くといわれて、端午の節句に使用された。カヅラは蔓性植物や柳の枝などを輪状にして頭に載せる装飾。○こゆーこはここ。このユは通過点を示す。

今二臺に重出。題詞の「古詠」に当る。

一 富山県水見市南部にかつてあった湖水。東は窪・島尾、南は二上山北麓の西田・上田子・下田子・神代、西は栗原、北は万尾・矢崎にまで広がり、湖岸には至る所に小湾や岬があつて風光絶佳であつた。家持ら越中国司はしばしばこの地に遊び、その時に詠んだ歌がこの後多数収められている。近世に至つてもなお極めて複雑な湖岸の凹凸があつた実状を写した十九世紀前半の『越中地図』が残っているが、その後急速に干拓が進み、現在は矢崎近くに十二町潟という細長い水路がわずかに当時の面影を偲ばせている。

4036 いかにある布勢の浦そもーどの程度布勢の海水が美しいというわけか。現地に案内されて「おろかにそ我は思ひし(四四九)」と言っていることから考えて、家持が自慢するほどのことはなからうとこの時福麻呂は想像していたようである。このソは疑問の用法。結びは留ムル。○君、大伴家持をさす。

4037 平布の崎は 漕ぎまわりつつ 一日じゅう 見ても飽きるような 浦ではないの

に「また「あなたが尋ねられることよ」

右の一首は、守大伴宿禰家持

4038 (玉櫛笥) 早く夜が明ければよいに 布勢の海の 浦をいきつつ 玉をも拾おう

に

4039 噂にだけ 聞いてまだ見ていない 布勢の浦を 見ずには帰京しまい 年は過ぎ

ても

4040 布勢の浦を 行って見たなら (もししきの) 大宮人に 語り伝えましよう

4037 平布の崎―布勢の水海南岸の二上山

麓が複雑な曲線を描きつつ岬をなしていた部分であろう。現在の水見市下田子の辺から國・大浦を経て堀田に至る丘陵地がそれにと思われるが、多祢の崎、垂姫の崎などとの関係を明確にしたい。○漕ぎたもとほり―タモトホルには、迂回する、先へ進めず同じ所をうろうろする、などの意がある。ここはそのどちらでも通ずるが、佳景に心を奪われて前進できないと解して後者を採る。○ひねもすに―一日じゅう。「終日」(七五)と記した例もある。○見とも―見ルなどの上―一段動詞はラム・ラシ・ベシ・トモなどの助動詞・助詞へはその連用形から接続した。○「君が問はすも」―第六句